

# イソップ寓話の変容

## ——ラ・フォンテーヌの『蝉と蟻』について——

森井 正史

### 前書き

筆者は、1993年に行われた第3回光華女子大学公開講座で、イソップ寓話集の中から特に『蝉と蟻』を取り上げ、この寓話が、フランスのラ・フォンテーヌの『寓話集』*Fables* および日本語ローマ字本『イソポのハブラス』でどのように変容しているかということを中心に講師として論じた。本稿では、この問題を再び取り上げ、イソップ寓話の『蝉と蟻』*La Cigale et les Fourmis* とラ・フォンテーヌの『寓話集』の『蝉と蟻』*La Cigale et la Fourmi* をそれぞれ読み解き、後者が、フランス語の韻文にどのように書き改められているか、より一層詳細に考察したい。

### イソップ寓話なるものについて

イソップ寓話集なるものは、イソップ自信が書き残したものではなく、古代ギリシャのイソップが作ったとされる寓話を指してそう呼んでいるのである。<sup>(注1)</sup> 古代ギリシャ・ローマの時代から中世にかけて書かれた写本については、すでに内外の学者によって研究がなされ、論じられている。ここでは、そうした写本について、少しだけ触れておきたい。現在確認されている最古のイソップ寓話集とされているのは、ギリシャ語で書かれたものである。その資料は散逸して今日では見ることができないが、デメトリウス・バレロスが紀元前4世紀末頃編集した『アイソポス寓話集成』（前置型教訓）なるものが存在したということが、米国イリノイ大学ペリー教授によって確認されている。これは修辞用

文例集であり、古代ギリシャの学校で少年教育の作文の練習に用いられたという。ギリシャ語で書かれたものとしては、その他には、バブリウス集（紀元後1世紀、ギリシャ語韻文、多く前置型教訓）、『イソップ伝』を含むマクシム・プラヌーデス本（14世紀）などが挙げられよう。ラテン語で書かれたものとしては、ファエドロスによるイソップ寓話集（紀元後1世紀、韻文）があるが、ファエドロスの創作になるものも含まれていることが指摘されている。そのイソップ寓話は、修辞学の教師たちによって、授業用に教科書に取り入れられたという。中世には、ロムルス集（9－11世紀、ラテン語韻文・散文）と呼ばれるものなど種々の写本が存在する。イソップ寓話は、中世には、ギリシャ語やラテン語の格好の教材として用いられ、教会での説教などで引用されたりしたようである。イソップ寓話の中には、『烏と狐』などフランス中世の『狐物語』 *Le Roman de Renart* など民間伝承として語り伝えられたものもある。<sup>(注2)</sup>

15世紀の半ばにグーテンベルクが活字印刷機を発明してからは、イソップ寓話がドイツ語、英語、フランス語など、近世ヨーロッパのさまざまな言語に翻訳もしくは翻案され出版されている。印刷機が今日ほど普及していなかったことを考えれば、15世紀後半に印刷の対象として選ばれたということは、イソップ寓話がそれだけ価値のあるものと評価されていたことを示している。

### イソップ寓話『蟬と蟻』

ラ・フォンテーヌは、彼の『寓話集』の第1集（初刊本、1668年）を書くにあたって、上記のバブリウス集、ファエドロス集、プラヌーデス本や、その他、アヴィアーヌス集（4世紀、ラテン語韻文）などを直接あるいは間接的に底本としている。彼が最も多くを負っているのは、1610年にフランクフルトで出版（1660年、同じくフランクフルトで再版）された、イサック＝ニコラ・ヌーヴレ Isaac-Nicolas Nevelet の編集した *Mythologia aesopica*（ギリシャ語テキストの後にラテン語訳が付されている）である。ラ・フォンテーヌが底本とした、もとのイソップ寓話の『蟬と蟻』（ヌーヴレ集）がどのようなものか、ここで、そのフランス語訳で見てみよう。参考までに拙訳を付す。

## LA CIGALE ET LES FOURMIS

Pendant l'hiver, leur blé étant mouillé, les fourmis le faisaient sécher. La cigale mourant de faim, leur demandait de la nourriture. Les fourmis lui répondirent : « Pourquoi, en été n'amassais-tu pas toi aussi de quoi manger? — Je n'étais pas inactive, dit celle-ci, mais je chantais mélodieusement. » Les fourmis se mirent à rire. « Eh bien, si en été tu chantais, maintenant que c'est l'hiver, danse. »

Cette fable montre qu'il ne faut pas être négligent en quoi que ce soit, si l'on veut éviter le chagrin et les dangers. <sup>(注3)</sup>

### 蝉と蟻

冬の間、小麦が湿ったので、蟻たちがそれを乾かしていた。死ぬほど腹をへらした蝉が、蟻たちに食べ物をくれるよう頼んだ。蟻たちは答えた。「なぜ夏のうちに、食べ物を集めておかなかったの?」「何もしていなかったのではありません。調子よく歌っていました。」と蝉は言った。蟻たちは笑い始めた。「そうですか。夏に歌っていたのなら、今や冬となったのだから、踊ったら。」

この寓話は、惨めな思いや危ない目にあうことを避けたいなら、どんなこともおろそかにしてはいけないということを示している。

ここに登場するのは、言うまでもなく蝉と蟻たち（「蟻」は複数形 fourmis）であり、いずれもが主役である。イソップ寓話の特色は、1人の主役を中心に物語が展開される童話やおとぎ話と異なり、登場人物（主として動物であるが、植物や人間などが登場する寓話もある）は、多くは、立場や性格の異なる2人

(2匹)である。3人(3匹)の場合もある。話は短く簡潔であり、大抵は教訓がつけられている。寓話は教訓などを伝えるためのたとえ話であり、当然のことだが、教訓によって作者の意図が直説示されるのである。イソップ寓話は、多くの場合、話の後に教訓がくる、いわゆる後置型教訓である。また、登場するのは主として、擬人化された動物であり、固有名詞を持つことはまれであり、《Chien》「犬」、《Loup》「狼」、《Corbeau》「烏」というように、種族の名前で呼ばれている。登場人物(動物)が一般的なタイプ(典型)もしくは象徴として示されるからである。ちなみに、フランス語で「狐」という語は現在は《renard》であるが、これは12～14世紀に『ルナールの物語』*Roman de Renart*が広まった結果、主役である狐の固有名詞Renart(ルナール)が、《goupil》(狐)という語に取って代わり、普通名詞《renard》となったのである。このように、固有名詞が普通名詞になった例もある。

上掲の『蟬と蟻』の表現は簡潔であり、他のイソップ寓話同様、教訓を示すために最小限必要と思われる行為とセリフで成り立っている。話の展開の仕方は、よく知られている通り、単純で明快である。冬のある日に蟻たちが穀物を乾かしているところへ、蟬がやってくる(主役の登場)。蟬が蟻たちに食べ物をくれと頼み、夏に歌ってばかりいて食べ物を蓄えるのを怠ったために困っているという、蟬の置かれた窮状が示される(状況の提示)。こうして、困っている者に食べ物を与えるかどうかという、蟻たち行動の選択の如何に興味向けられる。ここで話は一気にクライマックスに達し、読者または聞き手の関心を引きつけるのである。その直後に蟻たちは蟬をすげなく笑う。つまり、食べ物を与えなかったということ(結末)が暗示され、話は幕を閉じる。そして、この一連の出来事から引き出された教訓として、作者の伝えたいメッセージが最後に語られるのである。ここでは、メッセージは、未来の非常事態に備えることの重要性である。

この寓話の出来事を時間の順に整理すれば、一連の出来事が三段論法で論理的に展開されていることが分かる。つまり、蟻は夏の間に歌を歌ってばかりいたために冬になって食べ物に困った。一方、蟬たちは食べ物を蓄えておいたの

で困っていなかった。そこで蟬は蟻たちに食べ物を乞いに来たというものである。表現は素朴で気取りがなく、一連の出来事の因果関係が論理的かつ単純明快に示され、教訓が説得力のあるものとなっているのである。

### ラ・フォンテーヌ『寓話集』

フランスでは、イソップ寓話は、17世紀の詩人ジャン・ドゥ・ラ・フォンテーヌ（1621－1695）がフランス語の韻文に翻案した『寓話集』で知られている。この作品で用いられている表現は、今日ではあまり用いられない古めかしいものとなっているのであるが、小学校のフランス語の授業で、この『寓話集』が伝統的に用いられてきたのである。このことは、現在もこの作品がフランス文学の古典の一つとして依然として高く評価されていることを示している。

この『寓話集』は、初版（第1集）と続編（第2集、第3集）を合わせて、全体では237編の寓話から成り、12巻に分けられている。1668年3月に出された第1集（第1巻－第6巻、124篇）の冒頭には王太子（ルイ14世の長子、当時6歳）への献辞と序文およびイソップ伝が付されている。この献辞には、ルイ14世への賛辞が含まれていて、王に対する配慮のほどが窺える。絶対王政の下では、こうした献辞を掲げることは、むしろ自然なことであつたであろう。第1集は、同年に2回再版が出され、翌年の1669年には3回出版され、出版上、大きな成功をおさめている。それは輝かしい文学的成功でもあつたのである。古典主義時代の理論家ニコラ・ボワロー Nicolas Boileau（1636－1711）は、自分がこの『寓話集』を出版するよう書店を説得したのだと、後に主張しているが、それは、ほとんどあり得ないと言われている。<sup>(注4)</sup>

ところで、ラ・フォンテーヌは金銭的なことに関心が薄かったが、シャンパーニュ地方で河川森林監督官をしていた父が亡くなってから、生活のためにパリへ出て大蔵卿フーケの庇護を受けることになり、『小話詩』Contesを書いていた。これは、軽妙で、いささかみだらな恋愛小話集であり、読者を喜ばせるために文学的才能を発揮していたのであるが、いわば書くために書いていたのであり、必ずしも満足してはいなかったであろう。自然や人生や美しいものを

愛した彼は、人間界の一種の縮図とでも言うべき寓話集を書くこととなるのである。イソップの寓話は、既にフランス語の散文に訳されたものがあり、1660年頃流行していて、恐らく彼も無関心ではなかったであろう。彼はイソップの寓話をもとにして、フランス語の韻文の寓話を書き、文学の域にまで高めたのである。

イソップの寓話は、言うまでもなく動物寓話であり、主として動物を擬人化して教訓や風刺を含めたたとえ話である。動物は、当時は、特に社交界に出入りする貴族や富裕なブルジョワたちから蔑視され、機械と同じようなものだと見なされていたという。優しいマルブランシュが、猫を叩いて、猫は何も感じないのだ、その叫び声は喉からはき出される風でしかないと主張している、と文芸批評家イポリート・テーヌ（1828－1893）は語っている。イソップの寓話が流行していたのは、専ら道徳や教訓に対する関心からであり、少なくとも社交界に出入りする人たちにとっては、動物や自然に対する関心は、ほとんど無かったと言われている。<sup>(注5)</sup> 当時の文学作品においても、自然が描かれることが全く無いではないが、まれである。シャンパーニュ地方の田園で育ち、Honoré d'Hurfé (1567－1625) の牧歌小説『アストレ』L'Astrée (1607－1627) を好んだ彼にとって、自然の中で展開される動物を主人公にした話（寓話）を書くことには、さほど抵抗はなかったのではないかと思われる。但し、ラ・フォンテーヌが動物のことをよく知っていたとは必ずしも言えない。この点が、後に昆虫学者ファーブルによって批判される原因となるのである。

さて、ラ・フォンテーヌの『蟬と蟻』で、どのようにフランス語の韻文に書き改めているか考察しよう。

## LA CIGALE ET LA FOURMI

La Cigale, ayant chanté

Tout l'été,

Se trouva fort dépourvue

Quand la bise fut venue :  
Pas un seul petit morceau  
De mouche ou de vermisseau.  
Elle alla crier famine  
Chez la Fourmi sa voisine,  
La priant de lui prêter  
Quelque grain pour subsister  
Jusqu'à la saison nouvelle.  
« Je vous paierai, lui dit-elle,  
Avant l'oût, foi d'animal,  
Intérêt et principal. »  
La Fourmi n'est pas prêteuse :  
C'est là son moindre défaut.  
« Que faisiez-vous au temps chaud?  
Dit-elle à cette emprunteuse.  
— Nuit et jour à tout venant  
Je chantais, ne vous déplaie.  
— Vous chantiez? j'en suis fort aise :  
Eh bien! dansez maintenant. <sup>(注6)</sup>

### 蟬と蟻

夏の間ずっと  
蟬は歌を歌っていたために、  
北風が吹いてきた時  
食べ物にひどく困ってしまった。  
蠅や小さな虫の  
ひとかけらさえ見つからない。

おなかですいてたまらなくなり、  
 近所の蟻の家へ行き  
 春まで生きのびるため、  
 穀物を少し貸して、と頼む。  
 「動物の名誉にかけて、刈り入れまでに、  
 元利そろえてお返しします。」  
 蟻は貸すことを好まない。  
 貸すなどという不徳なことは、しそうにない。  
 「暑い時期には何をしていたの？」と  
 蟻はこの借り手に言う。  
 「夜も昼も、誰彼なしに  
 歌を歌っていました。悪く思わないで下さいな。」  
 「歌を歌って？そりゃ結構ですね。  
 それじゃ、今度は踊りなさいよ。」

この寓話で、内容的に上掲のイソップ寓話『蟬と蟻』と異なっているのは、まず、ラ・フォンテーヌの方では、蟬の空腹の原因を、「蠅や小さな虫」が見つからないためであるというように、具体的に表現している点である。季節が冬であることを、「北風が吹いてきた時」としているのも同様である。寓話が具体的で絵画的なものとなり、子供にとって分かりやすく、興味を持ちやすいように書き換えられている。

次に、もとの寓話と異なっているのは、よく指摘されるように、蟻が食べ物をくださいと頼むのではなく、借りた物《principal》「元金」に《intérêt》「利子」をつけて、一定の期日までに《avant l'oût》「刈り入れまでに」返すと誓っている（《Je vous paierai [...] foi d'animal.》「動物の名誉にかけて [...] お返ししますわ」）点、つまり、利子をつけて返すから貸してくださいと、対等な立場で頼んでいる点である。そこに17世紀フランス絶対王政下での商業主義の反映を見ることができるであろう。いずれにせよ、物を乞う蟬の屈辱的な



立場は緩和され、蟬があくまで誇り高い存在となっているのである。いかにも自尊心の強いフランス人の一般的傾向が現れていると見ることもできる。が、蟬の境遇にラ・フォンテーヌは自分の置かれた境遇を恐らく見ているのであり、蟬が他人に物乞いをする惨めな存在のままにはしたくなかったのであろう。歌を歌う蟬は詩人の姿そのものであり、食べ物を借りなければ生きていけない蟬の窮状は、文芸保護者のもとで生きねばならないラ・フォンテーヌ自身の境遇そのものである。この『蟬と蟻』が寓話集の最初に置かれているのは偶然ではなく、読者のために詩作に没頭する己自身の姿をこの寓話に見ていたからこそ、誰もが最初に読むであろう位置に置いたのであろう。詩人が自分の境遇を詩の中で動物に託して歌っている例としては、ボードレールの *L'Albatros* 『あほう鳥』が挙げられる。この詩は、詩集 *Les Fleurs du mal* 『悪の華』(1871年再版)の第1部 *Spleen et idéal* 『憂鬱と理想』の2番目に置かれている。ボードレールは、最初に置かれている『祝福』では詩人の宿命を歌い、次いで『あほう鳥』で、実生活では不器用で惨めな生活を強いられるが、詩の世界では威風堂々と飛翔する詩人の生きざまを、あほう鳥に託して歌っているのである。ラ・フォンテーヌにせよ、ボードレールにせよ、詩の創作が天職 *vocation* であるという矜持があるのである。

17～18行目 *« La Fourmi n'est pas prêteuse : C'est là son moindre défaut. »* は、もとのイソップ寓話には無く、ラ・フォンテーヌが付け加えたものであり、直訳すれば、「蟻は貸したがない。それは彼女の一番小さな不徳である」となり、作者が何を言わんとしているのか分かりにくい。どういう意味か解釈の分かれるところである。まず、*« C' »* (= *Ce*) 『それ、そのこと』が *« La Fourmi n'est pas prêteuse »* をそのまま受けて「貸したがないこと」という意味なのか、それとも *« être prêteux »* 「貸したがること」を指しているのか、いずれにも取れる。<sup>(注7)</sup> が、同時代の喜劇作家モリエールの『亭主学校』*École des Maris* の第1幕第4章に、これと似た表現：*« Je coquette fort peu, c'est mon moindre talent. »* (直訳「私はめったに女性を口説きません。それは私の一番小さな才能です」)がある。これは、「私はめったに女性を口説きません。

そんな才能は私にはありません」という意味である。このことから類推すれば、上のラ・フォンテーヌの2行の《C'》(=Ce)は、アリが貸したがることを指していて、「蟻は貸したがらない、貸したがることは、けちの蟻にとって不徳であり、そのような不徳を蟻は持ち合わせない」という意味になると取るのが適切であろう。<sup>(注8)</sup> いずれにせよ、未来に備えようするあまり、困っている者を助けようとしないう蟻のエゴイズムを、作者は皮肉をこめて語っているのである。

ラ・フォンテーヌの寓話には、動物界と人間界の対比からくるユーモアもしくは滑稽さも見られる。13行目の《foi d'animal》(「動物の誓い」は「動物の名誉にかけて」の意)は、《foi de gentilhomme》(「紳士の名誉にかけて」というような表現を動物に当てはめたものである。蟬が人間と同じように誓っているところに、人間界のやり取りを動物界に当てはめることからくる、動物寓話ならではの可笑しさがある。動物寓話は、動物の物語と人間の物語が並行している1つのディスクール un discours (物語言説)であり、この並行関係をラ・フォンテーヌは巧みに利用しているのである。

13行目の《avant l'oût》(「刈り入れまでに」)は、フランス語では比喩表現になっている。《avant l'oût》の《oût》は、現代の綴りは《août》であり、もっぱら「8月」という意味だが、8月が小麦の刈り入れ《moisson》の時期であることから、当時は「刈り入れ」をも意味していた。<sup>(注9)</sup> 普通なら「刈り入れまでに」《avant la moisson》(5音節)というべきところを、ラ・フォンテーヌは、《avant l'oût》と3音節にして表現しているのである。このような言い回しは今では古い比喩表現となっている。このような表現にしているのは、単に詩的価値を高めるためだけではなく、1行の音節数を7音節に揃えるためでもあったであろうことは明らかである。

次に、音声面について考察しよう。ラ・フォンテーヌは、イソップ寓話を韻文に書き改めるにあたって、押韻 rime、詩句 vers、句切り césure、半諧音 assonance、畳韻法 allitération などの点で、さまざまな工夫をしている。まず、この寓話詩は、2種類の押韻、つまり平韻(=連続韻)(aa型)と抱擁韻(abba

型)の自由な組み合わせで作られている。(押韻の仕方には、その他に交互韻 abab 型がある。)前半は7つの平韻で構成されている。平韻で押韻されている部分を下線で示すと次のようになる：《chanté[te], l'été [te]》《dépourvue[y], venue[y]》《morceau[so], vermisseau[so]》《famine[in], voisine[in]》《prêter[te], subsister[te]》《nouvelle[el], elle[el]》《animal[al], principal[al]》。後半は2つの抱擁韻で構成されている：《prêteuse [tø:z], défaut[o], chaud[o], emprunteuse[tø:z]》《venant[nā], déplaie[ε:z], aise[ε:z], maintenant[nā]》。こうした脚韻の構成は、フランス詩でポピュラーな定型詩ソネ sonnet (4行・4行・6行の計14行から成る)などと異なる自由な構成となっている。

各詩句 vers は、2行目が3音節、それ以外の詩句が7音節というように奇数の音節数で構成されている。フランス詩では、普通は、偶数の音節数からなる詩行(12、10、8、…音節)で作られ、ラ・フォンテーヌも、他の寓話では、ほとんどの場合そうしている。奇数の音節から成る詩句は、偶数の音節から成る詩句が安定した印象を与えるのとは異なり、一般的に、不安定・不安・ぎこちなさなどの印象を与える。この寓話詩では、通常よく用いられる詩句より短い7音節のリズムが用いられ、ぎこちなさとスピード感を感じさせ、議論をしているという印象を与えているのである。2行目だけは3音節であり、《Tout l'été》(「夏の間ずっと」)という表現を浮き彫りにし、蟬が食べ物を蓄えずに、夏の間歌を歌い続けていたことを形の上でも強調しているのである。

次のような音響的表現効果も見られる。4行目《Quand la bise fut venue》(「北風が吹いてきた時」)の[f]、[v]という唇歯音が風の音を連想させ、[i]、[y]という鋭い母音の連続が北風の厳しさを表す効果を出しているのである。<sup>(注10)</sup>

このように、リズム、押韻、音響効果など、ラ・フォンテーヌの『蟬と蟻』には、もとのイソップ寓話のそれには見られない、様々な作詩上の工夫がなされているのである。本稿では、一つの寓話しか取り上げられなかったが、他の寓話についても同様である。彼の『寓話集』が高く評価されているのも、そうした工夫の成せる業であろう。既に16世紀にイソップ寓話がフランス語の韻文に翻訳されているが、注目すべきものは無いという。<sup>(注11)</sup>

## 結び

何らかの教訓やモラルを子供に教えるための例証として寓話を用いるのであれば、文章をあれこれと練り上げる必要はない。イソップ寓話『蟬と蟻』（ヌーヴレ集）のように単純で明快なほど教育効果が上がるであろう。が、ラ・フォンテーヌは、イソップの寓話を、子供も、また大人も楽しめるものに書き換えたのである。ラ・フォンテーヌが語りかけているのが子供だけではなく、伝統的な寓話に飽き足らない、洗練された読者でもあったとすれば、なおさら気の利いたものにする必要があったのであろう。多くの寓話で教訓を省いたのも、そういう読者を意識してのことであろうと思われる。ラ・フォンテーヌの『蟬と蟻』を見ても分かるように、テーマはイソップ寓話のそれと変わりはない。彼の寓話の特徴は、皮肉やユーモア、その他、同情、哀れみ、諦めなどをこめた語り口や、音声面の表現効果や比喻表現などの詩的価値である。本稿は、その一端に触れたに過ぎない。

ラ・フォンテーヌの生きた17世紀古典主義の時代には、韻文で書かれた格調の高いものであることが文学作品に求められたのであり、実際、悲劇や喜劇も多くは韻文で書かれている。登場人物のセリフ（会話）の大半が韻を踏んでいるのである。文芸保護は、当時は貴族や富裕なブルジョワのステイタスを示すものの一つであったのであり、彼らは競って文芸保護を行ったのである。

ラ・フォンテーヌの『寓話集』は、高く評価され続けてきたが、一方では、批判も受けることもあった。教訓が多くの場合、省かれているため、寓話によっては、子供が教訓を取り違えてしまう可能性が生じているのである。ルソーが、子供にラ・フォンテーヌの『寓話集』を十分理解できないうちから覚えさせることに強く反対しているのも、そのためである。また、ファーブルは、昆虫学者の立場から、ラ・フォンテーヌの『蟬と蟻』を批判している。これらの点については、稿を改めて論じたい。

## 注

- (注1) この寓話の作者については、イソップという人物がそもそも実在したかどうかということがしばしば問題とされるが、ギリシャの歴史家ヘロドトスが、その『歴史』の中でイソップについて言及していることから、また、プラトンやアリストテレスもイソップについて言及していることから、その実在性はほぼ疑いのないものとされている。われわれもそのように受け取ってよいであろう。さまざまな歴史的資料の検証によれば、イソップは、紀元前6世紀の末頃フリギア（小アジア）というところで生まれ、サモスで奴隷として働き、その機知と才覚が認められて解放され、ギリシャで転々として生き、最後にデルフォイであらぬ罪を着せられて死刑に処されている。紀元前4世紀には、彼はギリシャで既に寓話作家として知られていたようである。(Ésope: *Fables*, par É. Chambry, pp.IX – XVII 及び中務哲郎訳『イソップ寓話集』 pp.364 – 367)
- (注2) *Ésope : Fables*, par É. Chambry 及び小堀著『イソップ寓話：その伝承と変容』ほか)
- (注3) Jean de La Fontaine, *Fables*, nouvelle édition par R.Radouant, p.15.
- (注4) Jean de La Fontaine, *Fables choisies*, avec des notices par Claude Dreyfus ; 1, p.10.
- (注5) H.Taine, *La Fontaine et ses Fables*, pp.162 – 165.
- (注6) Jean de La Fontaine, *Fables*, in La Fontaine : Œuvres complètes I (Bibliothèque de la Pléiade), Fable I , p.31.
- (注7) *ibid.*, p.672.
- (注8) Jean de La Fontaine, *Fables*, nouvelle édition par R.Radouant, notices, p.367.
- (注9) 同じ『寓話集』の第6巻第IXに« Remuez votre champ dès qu'on n'aura fait oût. » 「刈り入れをしたら、すぐお前たちの畑を耕すのだ。」という表現が見られる。ここでは、« oût » は、もっぱら「刈り入れ」という意味で用いている。

(注10) Cf. Maurice. Grammont : *Petit Traité de Versification Française*.

(注11) Ferdinand. Gohin, *L'art de La Fontaine dans ses Fables*, pp.139 – 141.

## 参考文献

- Jean de La Fontaine, *Fables*, in La Fontaine : Œuvres complètes I (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, Paris, 1979.
- Jean de La Fontaine, *Fables*, édition de G.Couton, Garnier, 1962.
- Jean de La Fontaine, *Fables*, nouvelle édition par R.Radouant(Classiques Hachette), Hachette, Paris, 1929.
- *Ésope : Fables*, texte établi et traduit par Émile Chambry, 3<sup>e</sup> tirage, Société d'Édition « LES BELLES LETTRES », Paris, 1967.
- Jean de La fontaine, *Fables choisies*, avec des notices par Claude Dreyfus ; 1,2 (Nouveaux classiques Larousse), Larousse, Paris, 1971.
- *Le Roman de Renart*, édition publiée sous la direction d'Armand Strubel ; avec la collaboration de Roger Bellon, Dominique Boutet et Sylvie Lefèvre, Gallimard, Paris, 1998.
- Hippolyte Taine, *La Fontaine et ses Fables*, 27<sup>e</sup> édition, Hachette, Paris, 1929.
- Baudelaire, *Les fleurs du mal*, in Baudelaire : Œuvres Complètes I (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, Paris, 1975.
- Molière, *L'École des maris*, in Molière : Œuvres Complètes (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, Paris, 1971.
- Jean Dominique Biard, *Le style des fables de La Fontaine*, A.-G. Nizet, Paris, 1970.
- Ferdinand Gohin, *L'art de La Fontaine dans ses Fables*, Garnier, Paris, 1929.
- Maurice Grammont : *Petit Traité de Versification Française*, Armand Colin, Paris, 1965.
- Patrick Dandrey, *La fabrique des Fables : Essai sur la poétique de La Fontaine*, 2<sup>e</sup> édition, Klincksieck, Paris, 1992.

- ・ Olivier Leplatre, *Le pouvoir et la parole dans les Fables de La Fontaine*, Presses universitaires de Lyon, Lyon, 2002.
- ・ Marlène Lebrun, *Regards actuels sur les Fables de La Fontaine*, Presses universitaires de Septentrion, Villeneuve d'Ascq, 2000.
- ・ Jean-Jacques Rousseau, *Émile*, in Jean-Jacques Rousseau : Œuvres complètes IV (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, Paris, 1969.
- ・ Jean-Henri Fabre, *Souvenirs entomologiques : étude sur l'instinct et les mœurs des insectes*, édition établie par Yves Delange, t.1, V<sup>e</sup> série, chapitre XIII : La Fable de la cigale et la fourmi, Robert Laffont, Paris, 1989.
- ・ Pierre Richelet, *Dictionnaire de la langue française : ancienne et moderne*, D'après la nouvelle édition augmentée de 1759, Les Frères Duplain, Lyon. Reproduction par Rinsen Book Co., Kyoto, 1987.
- ・ J.Dubois, R.Lagane, A.Lerond, *Dictionnaire du français classique: le XVII<sup>e</sup> siècle*, Larousse, Paris, 1992.
- ・ 『通俗伊蘇普物語』（東洋文庫）（渡部 温『通俗伊蘇普物語』1873年：全6巻の翻刻）平凡社、2001年
- ・ 『イソップ寓話集』（岩波文庫）中務哲郎訳、岩波書店、2000年
- ・ 『イソップ寓話：その伝承と変容』（講談社学術文庫）小堀桂一郎著、講談社、2001年
- ・ 『イソップ寓話集』（全2巻）渡辺和夫訳、小学館、1982年